

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

吃音のある成人における注意・感情制御に着目した

吃音症状・社交不安の維持メカニズムの検討

**Investigation of the maintenance of stuttering and social anxiety in
terms of attentional and emotional regulation in adults who stutter**

2019年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

灰谷 知純

HAITANI, Tomosumi

研究指導担当教員： 熊野 宏昭 教授

吃音症は、語の繰り返し・引き伸ばし・ブロックを中核症状とする発話の障害であるが、吃音のある成人は、社交不安症をはじめ、様々な二次的な心理社会的障害を抱えることが知られている。本学位論文は、神経心理学的な注意機能や、日常生活での注意・感情の機能や感情制御に着目し、吃音のある成人への支援に関する臨床的示唆を得ることを目的とする。本学位論文は、全6章から構成される。

第1章では、第一に、吃音の特徴と疫学的知見、社会的不利益や社交不安について概観したうえで、吃音のある成人に対する発話治療や認知行動療法の応用について要約し、注意に着目することが有効である可能性について論じた。さらに、注意は、神経心理学的介入に反応すると考えられる、感情に直接的に関連しないものと、臨床心理学的介入に反応すると考えられる、感情に直接的に関連するものに分類されうることを指摘し、後者の注意については、感情制御というより広範な文脈の中で捉えられることを述べた。

第2章では、従来の研究の課題と本研究の目的について述べた。第一に、吃音のある成人における神経心理学的な注意機能の特徴や、感情に直接的に関連しない日常生活での注意の機能が不明瞭である点(研究1)、第二に、臨床心理学的に吃音のある成人の社交不安を扱う際、どのような場面や生活機能障害に着目する必要があるかが不明瞭である点(研究2,3)、最後に、吃音のある成人の日常生活において、どのような感情や感情制御(注意を含む)が問題となりうるか、また、これらは心理特性とどのように関連するかが不明瞭である点(研究4)を挙げた。これらのことから、本研究では、神経心理学、及び臨床心理学の観点から、吃音のある成人の注意や感情制御に着目し、問題維持のメカニズムに関する臨床的示唆を得ることとした。

第3章では、吃音のある成人における神経心理学的な注意機能について明らかにするため、吃音のある成人20名、吃音のない成人男性18名を対象に、注意機能を測定する注意ネットワークテストを実施し、日常生活での注意の機能を測定する注意機能尺度への回答を求め、吃音症状やネガティブ感情との関連を調べた。その結果、吃音のある成人においては、葛藤を処理する能力が低く、多動性が高い傾向にあるものの、それらは吃音症状やネガティブ感情を十分に説明しないことが明らかとなり、注意機能に対する神経心理学的な介入は、吃音のある成人においては有効でない可能性があることが示唆された。

第4章では、研究2においては、様々な場面における社交不安をアセスメントする、標準的な心理尺度である Liebowitz 社交不安尺度 (LSAS) に着目し、不安症のある臨床サンプルとの比較を通して、吃音のある成人の社交不安の特徴を明らかにすることを目的とした。援助希求を行う吃音のある成人328名のLSASの回答に対して確認的因子分析を行った結果、不安症のある臨床サンプルで支持されていたLSASの因子構造は吃音のある成人では支持されなかった。探索的因子分析の結果に基づき、因子得点の推定値を予備的に比較した結果、吃音のある成人では、主に発話を伴わない場面では不安は相対的に低い一方で、発話を伴う場面では不安が高まる傾向にあることが示され、発話場面に特化した治療戦略を取る必要があることが示唆された。

研究3では、LSASを含む様々な生活機能障害を測定する心理尺度の回答に対して統計解析を行い、社交不安がどのような生活機能障害と直接的に関連しうるかを明らかにすることを第一の目的とした。また、吃音のある成人において発話努力がどのように生活機能障害と関連するかを調べることを第二の目

的とした。援助希求を行う吃音のある成人 245 名の回答を対象に、ネットワーク分析、及び因子分析を行った。その結果、吃音のある成人の社交不安はコミュニケーション困難と直接的な関連が強いことがわかり、この「コミュニケーション困難・社交不安」を反映する生活機能障害は、「吃音に対する心理的反応やそれに関する機能障害」と異なる問題の側面を構成することが分かった。また、発話努力はいずれの生活機能障害とも弱い関連しか示さなかった。研究 3, 4 の結果から、吃音のある成人の社交不安の緩和には、発話を伴う社交場面におけるコミュニケーション困難を解消することが有効であると考えられた。

第 5 章では、吃音のある成人の日常生活での発話を伴うコミュニケーション場面において、どのような感情や感情制御が自覚的吃音症状やコミュニケーションの満足度と関連するかを明らかにすることを目的とした。吃音のある成人 27 名を対象に、Ecological momentary assessment (EMA) を用いて、2 週間の間、発話を伴うコミュニケーション場面における感情や感情制御、自覚的吃音症状やコミュニケーションの満足度を即自的に反復測定し、状態値・特性値のそれぞれについて統計解析を行った。その結果、状態レベルでは、自覚的吃音症状には吃音に対する注意バイアスや発話努力などの、吃音に対する対処を反映する要因が関連し、特に当事者団体への参加経験のないものにおいて、ネガティブ感情は吃音に対する対処と関連していた。一方で、コミュニケーションの満足度には、吃音に対する対処だけではなく、ポジティブ感情や注意の集中が関連し、これらのポジティブな要因とネガティブ感情や吃音に対する対処との間の関連は弱かった。また、特性レベルでは、自覚的吃音症状は、吃音に伴う困難や社交不安をアセスメントする標準的な尺度と弱い関連しか示さず、自覚的吃音症状は心理特性では十分に説明されない可能性があることが示唆された。さらに、特性的な社交不安は吃音に対する対処と関連した一方、特性不安は注意の集中と関連することが示唆され、心理特性に応じて異なる働きかけを行うことが有効であることも示唆された。

第 6 章では、本研究で得られた知見について要約し、臨床的示唆に触れるとともに、吃音のある成人に対する治療アプローチについての展望を述べた。本研究の結果からは、吃音のある成人に対しては、神経心理学的な注意機能に対する介入ではなく、発話場面におけるコミュニケーション困難を緩和させることができる、臨床心理学的な介入を行う必要があることが示唆された。さらに、吃音のある成人の困難を把握するには、質問紙を用いた概括的な回想回答だけではなく、場面場面での変動性を考慮することができる、即自的回答を用いることが有用であることが示唆された。即時的回答を用いた場合、発話場面におけるコミュニケーションの満足度にはコミュニケーションに対する注意の集中が最も強く関連しており、注意の集中はポジティブ感情とも関連したことから、吃音に対する対処などのネガティブな側面だけではなく、ポジティブな側面にも働きかけることが支援を行う上で有効であると考えられた。

吃音のある成人の問題維持のメカニズムに関する実証的研究は乏しく、神経心理学・臨床心理学の両観点から吃音のある成人の困難の維持メカニズムを明らかにしようとした本研究は、吃音のある成人の心身の健康の維持増進にも寄与しうる。また、心理学の観点から吃音症状や発話努力についての考察を行ったことは、発話言語病理学との学際的発展にもつながる。これらのことから、本研究は、生活の質の向上や、現象の包括的な理解を目指す人間科学への貢献にもつながると言える。